

浜松市に住む日系ラテンアメリカ女性たちの生き方 —週末のオシャレ 化粧の選択 アイデンティティー—

鈴木 富 好 江

1. はじめに

デカセギ¹として家族とともに来日した日系ラテンアメリカ女性たちは、日本社会で生きていく上で、言葉、子どもの教育、労働などさまざまな問題を抱えている。これまで、在日日系ラテンアメリカ人が日本社会でより良い生活を送るための戦術²として、高収入の職業に就くことや日本語の習得、より良い環境への移住などが挙げられ、彼女たちが日本社会に順応することが日本社会をうまく生き抜く方法であるとされることが多かった。しかし、日本とラテンアメリカ2つの文化の中で生きる彼女たちに日本で生活する以上、全てを日本社会に合わせることは不可能であり、ストレスもたまる一方であると考えられる。

また従来の日系ラテンアメリカ人研究は、日本の企業で働く男性（夫）や家族単位で着目され、その多くが厳しい生活環境や地域社会とのさまざまな問題に彼らがどう向き合っているのか、そして彼らの将来について、が主であった。しかし、労働者ではなく一般的に主婦といわれる、家庭を守り、子育てにおわれ、日本的な主婦像を求められストレスを感じることも多いであろう既婚女性に着目し、彼女たちのさまざまな苦難を乗り越えるための前向きな生き方に光を当てた研究は少なかった。

本論文では、浜松市に住む日系ラテンアメリカ女性たちの日常的実践の中にあると思われるオシャレ文化の一つ“化粧”行為に着目し、日本で強く生きていくための戦術として、化粧をどう用いているのか考察した。

2. 論文概要

第1章では、1908年から多くの日本人がブラジルをはじめとするラテンアメリカに渡り、その地に日本人社会を作り上げ、100年という時を経てその子孫たちが再びデカセギとして日本に

*国際人間学研究科 国際関係学専攻

還流した歴史的背景、日本国内でも日系ラテンアメリカ人が特に多い浜松市に着目し、浜松市に存在するラテンアメリカについて考察し、中でも光の当たることがなかった在日ラテンアメリカ女性を対象とし、彼女たちの苦悩や問題点について述べる。

第2章においては、在日ラテンアメリカ人のエスニック・アソシエーション活動、化粧の概要、ラテンアメリカ女性の化粧について述べる。

在日ラテンアメリカ人たちは、エスニック・アソシエーションを形成し、その中で充足する。エスニック・アソシエーションとは、文化人類学の分野においても研究がされているが、共通の目的や関心、趣味を持つ人々が、自発的に作る集団や組織のことである。主に、宗教がその共通点となっていることが多いが、ここで注目すべきことは、国籍を越えてエスニック・アソシエーションを作るということである。ラテンアメリカ女性も、ブラジルやペルーなど国籍は違えども同じエスニック・アソシエーションに属して活動していることが多い。彼女たちにとって、国籍など問題ではないのである。ラテンアメリカから遠い日本へデカセギに来たこと、日系人であること、女性であること、ファッションや化粧など共通の趣味があること、それだけで仲間なのである。アソシエーションの中では、日本社会の習慣やマナーを遵守しなくても良い。彼らは、BBQ やクリスマスパーティー、誕生日会、何でもない週末でさえ仲間たちと楽しい時間を共有する。また、働く夫や学校に通う子どもと比べて、家にいる時間が多く、コミュニケーションを取る事が少ない女性（主婦）たちにとって、アソシエーション活動は信頼できる仲間とのコミュニケーションを通して、情報交換をしたり、普段は控えているオシャレや化粧を楽しんだりすることで、ホッと安心できる場所になっている。日本で生活していく中で、厳しい生活状況にあるとき、女性（主婦）たちのオシャレ文化は、制限されることが多い。ほとんどの女性たちは、インタビューの中で「化粧品がもったいなくて毎日化粧をして、オシャレはできない。」と口にした。女性たちは、日本社会で生きていく中で化粧をはじめとするオシャレ文化の選択を強いられる。それは、いつ、どこで、どのような化粧やオシャレをするのかである。

日本で生活するラテンアメリカ女性たちにとっても、週1回のエスニック・アソシエーションで、好きな化粧、ファッションをしてもう一人の自分として輝くことで、ストレスの多い日本での生活を乗り越えていけているのではないだろうか。

第3章では、化粧を通してラテンアメリカ出身の女性たちが日本社会に適応するとともに、自文化を維持しているところがあるのではないだろうか、という仮説を元に浜松市で調査を実践し、筆者が得たインタビュー資料のデータ・分析を述べる。化粧という自分自身を飾るオシャレ文化によって、日本社会への適応と自文化維持の両面を生かし、どのように彼女たちが日本社会でうまく生きていくのかを考察する。

インタビュー調査の対象は、浜松市に住み子どもを持つ既婚の日系ラテンアメリカ女性である。日系ブラジル人、ペルー人、メキシコ人である。彼女たちの子どもが通う公立小学校の外国人児童支援教室や、彼女たちが週末に出かける繁華街にあるラテンアメリカ人向けの酒場、ラテンアメリカ人向けレストランや雑貨屋などで参与観察を行った。

調査方法は、浜松市立入野小学校で日系ラテンアメリカ人児童とその母親のペアでインタビュー調査を行った。彼女たちのほとんどが日本語で会話をすることが難しく、細かいニュアンスが分からないため、彼女たちの子どもに通訳をお願いした。個人的にインタビューを行うケースと2、3人同時にインタビューを行うケースがあった。質問項目は以下に載せた通りである。しかし、これはあくまでも基本的な質問項目であって、その時の流れにしたがって、できるだけ自由に話してもらう方法をとった。筆者の母親が勤務する浜松市立入野小学校に調査を依頼し、そこで在籍27名中9名の日系ラテンアメリカ人児童の母親にインタビューを実践した。インタビューを通して連絡を取り合うようになった2人の女性を介してあらたに2人の日系ラテンアメリカ女性を紹介してもらった。

第4章では、これまでに述べたラテンアメリカ社会と日本、浜松市におけるラテンアメリカ社会、ラテンアメリカ女性の生活、エスニック・アソシエーション、化粧、インタビュー調査のデータを踏まえ、浜松市に住む日系ラテンアメリカ女性たちの前向きな生き方について述べる。

3. おわりに

デカセギとして家族とともに来日した日系ラテンアメリカ女性たちは、日本社会で生きていく上で、上達しない日本語、地域住民との関係、子どもの教育などさまざまな問題を抱えている。「日本人でもなくラテンアメリカ人でもない、果たして自分は何者なのだろう」と、日々自分探しをしながらも日本での生活を送っている。

しかし彼女たちはそうした厳しい生活状況であっても、前向きに力強く生きていることがインタビュー調査から明らかになった。彼女たちをそこまで強くしているもの、それはエスニック・アソシエーションである。週末になると共通の趣味や関心を持ち、信頼できる仲間同士集まり、食事や会話を楽しむ。彼女たちにとって、国籍や出身地など関係ないのだ。日系人であること、ラテンアメリカ出身であること、何より女性として同じ悩みを抱え、その痛みを分かち合えることが大切なのである。ブラジル出身女性とペルー出身女性が同じ時間を共有している。そして、エスニック・アソシエーションで彼女たちは変身を遂げるのである。厳しい生活、家計を支えるために真っ先に犠牲にしなければならないのは、彼女たち自身のオシャレなのだ。しかし週末限定でオシャレは解禁される。日本人でもなくラテンアメリカ人でもない日系人である彼女たちの化粧を施し、オシャレをして本来の自分を取り戻している。

そうした彼女たちは、エスニック・アソシエーションという形で、日本の中で小さなラテンアメリカを実現している。それは信頼できる仲間同士、お互いがラテンアメリカ出身の日系人であることを確認する場ともなっている。

エスニック・アソシエーション活動、そして化粧という自分自身を飾るオシャレ文化によって、日本社会への適応と自文化維持の両面を生かし、彼女たちが日本社会で力強く生きていく一つの戦術になっていることを明らかにした。

注

- 1 就労目的の在日ラテンアメリカ人については、農閑期に都市部に出て働く日本人の出稼ぎと区別するため、既にブラジルをはじめとするラテンアメリカで定着しつつある ‘decaségui’ の訳語の「デカセギ」と表記する。
- 2 「戦略／戦術」という概念の提唱によって民衆の日常的実践を描いたミシェル・ド・セルトーの区別によると、「戦略」というより、むしろ「戦術」に近い（山ノ内 2012:162）。セルトーは、「戦略」と「戦術」を区別しているが、戦略とは「意思と権力の主体（所有者、企業、都市、学術制度など）が周囲の『環境』から身をひきはなし、独立を保ってはじめて可能になるような力関係のこと」（セルトー 1987：25）であり、「こうした戦略は、おのれに固有のものとして境界線をひけるような一定の場所を前提としており、それゆえ、はっきりと敵がわかっているもの（競争相手、敵方、客、研究の『目標』ないし『対象』）にたいするさまざまな関係を管理できるような場所を前提にしている」（セルトー 1987：25）と定義している。

一方、戦術とは、支配的な秩序における「戦略」とは異なり、権力の不在によって規定される、「自分のもの（固有のもの）を持たないことを特徴とする計算された行動」（セルトー 1987:101）であり、「自分にとって疎遠な力が決定した法によって編成された土地、他から押しつけられた土地でなんとかやっていく」（セルトー 1987：102）方法を指す。セルトーの「戦略／戦術」に従うと、日系ラテンアメリカ女性たちが編み出したエスニック・アソシエーション活動と化粧の選択は、彼女たちが日本でうまく生きていくための「戦術」であるといえる。

- 3 エスニック・アソシエーションとは、文化人類学でもしばしば研究されているが、共通の目的や関心、趣味を持つ人々が、自発的に作る集団のことを指す。ここで注目すべき点は、国籍や出身地は異なっても同じエスニック・アソシエーションに所属できるということである。ある特定の関心を追求し、一定の目的を達成するためにつくられる社会組織。社会学では、R. M マッキーバがコミュニティをアソシエーションと区別して概念化した（マッキーバ 1975、高橋 2008：115）。マッキーバによれば、コミュニティは社会生活、社会生活存在のための共同生活であり、他方アソシエーションは、共同の目的、つまり共同の関心や利害の追求のため組織される団体であるという。

アソシエーションとは、人々がある目的あるいは使命のために、市場原理や国家権力から自立して、相互に対等な立場で、自由意志によって自発的に参加し、対話的行為をとおして意思決定し、実践する民主的な非常利・非政府の連帯ネットワーク型組織である（佐藤 2007:12）。アソシエーションは、『人と人が出会い、ともに語り合い、理解し合い、結び合い、そして共に行う。相互肯定的な関係』である（佐藤 2007：76）。

参考文献

- ・青村郁太郎（1999）『ブラジルに於ける日本人発展史』日本図書センター
- ・阿部亮吾（2006）『エスニシティと日本の都市空間：フィリピン人女性エンターテイナーをべぐる差異と空間』
- ・池上重弘（2001）『ブラジル人と国際化する地域社会』明石書店
- ・池上重弘（2007）「浜松市における南米系外国人の生活・就労実態調査」、浜松市企画部国際課
- ・イシカワ エニウセ アケミ（1994）「日系ブラジル人のアイデンティティー象徴の循環的変容」『ラ

- テンアメリカ・カリブ研究1号』つくばラテンアメリカ・カリブ研究会編集部
- ・イシカワ エニウセ アケミ (2004)「ブラジルと日本における「日系人」の文化的変容—「日本人」・「日系人」・「ブラジル人」・「ガイジン」の違い」『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第5巻、第1号
 - ・イシカワ エニウセ アケミ (2009)「南米から人と文化を迎える～日系人社会と浜松～」『文化と芸術』Vol. 9、静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター
 - ・イシカワ エニウセ アケミ (2008)『「日本の記憶」と「ブラジルの記憶」—日系ブラジル人のアイデンティティ』、せりか書房
 - ・宇山光男、鈴木ゆかり、呉恵子 (1990)「メーキャップの心理的有効性」日本香粧品科学会誌
 - ・小内透 (2006)『日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界』、北海道大学大学院教育学研究科社会学研究室
 - ・梶田孝道 (1988)『エスニシティと社会変動』、有信堂
 - ・GRÁTIS (2013)『CARANOVA』Edição. 43
 - ・今野敏彦、藤崎康夫 (1984)『移民史 南米編』、新泉社
 - ・篠塚英子、横村愛、女性学研究会編 (1994)「異文化の中の日系人女性労働者」『女性と異文化』女性学研究3号、勁草書房
 - ・Circulação quinzenal (2013)『alternativa』ED. 320
 - ・セルター・ミシェル著、山田登世子訳 (1987)『日常実践のポイエティック』、国文社
 - ・高橋幸春 (1993)『日系ブラジル移民史』、三一書房
 - ・都築くるみ (1995)「地方産業都市とエスニシティ—愛知県豊田市H団地における日系ブラジル人と地域住民」、勁草書房
 - ・DISTRIBUIÇÃO GRATUITA (2013)『boadica』Edição. 76
 - ・永尾松夫 (1983)『女性における化粧意識』「化粧文化8」、ポーラ文化研究所
 - ・平松隆円 (2009)『化粧にみる日本文化：だれのためによそおうのか?』、水曜社
 - ・藤崎康夫 (1991)『出稼ぎ日系外国人労働者』、明石書店
 - ・PUBLICAÇÃO MENSAL『SUPERAÇÃO』Edição. 17
 - ・ブラジル日本商工会議所 (2005)『現代ブラジル事典』、信評論
 - ・細川周平 (2008)『遠きにありてつくるもの：日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』、みすず書房
 - ・前山隆 (1982)『移民の日本回帰運動』、日本放送出版協会
 - ・前山隆 (2001)「ブラジル日系人におけるエスニシティとアイデンティティ」—認識的・政治的現象として—『民族学研究』、御茶の水書房
 - ・前山隆 (2001)『異文化接触とアイデンティティ：ブラジル社会と日系人』、御茶の水書房
 - ・宮島喬 (1993)『外国人労働者と日本社会』、明石書店
 - ・森本豊富、根川幸男 (2012)『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって—』、明石書店
 - ・柳田利夫 (1999)『ペルー日系人の20世紀：100の人生100の肖像』、芙蓉書房出版
 - ・柳田利夫 (1999)『ペルー：太平洋とアンデスの国 近代史と日系社会』、中央公論新社
 - ・柳田利夫 (2002)『ラテンアメリカの日系人 国家とエスニシティ』慶應義塾大学出版
 - ・山口博史 (2011)「ニューカマー日系南米人支援活動に関する地域間比較枠組み形成に向けて」『東海社会学年報』3
 - ・山出裕子 (2009)『日系ブラジルの女性文化に関する一考察：ブラジルの「ニックエイ」と日本の「デカセギ」を比較して』、お茶の水大学
 - ・山ノ内裕子 (2010)「逆境を生き抜く—日系ブラジル人の移動と教育戦略」『年報教育の境界』第7号

- ・山本かほり、松宮朝（2011）「リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人労働者—A社ブラジル人調査から—」『社会福祉研究』13
- ・吉田忠雄（2006）『南米日系移民の軌跡』、中央印刷
- ・和崎春日（2008）『来往アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学の研究』
- ・渡辺雅子（1995）『出稼ぎ日系ブラジル人』、明石書店
- ・渡辺雅子（1995）『体験と意識』、明石書店
- ・『大百科事典』4（1984）平凡社

映画『孤独なツバメたち～デカセギの子どもに生まれて～』

2011年日本

監督：津村公博、中村真夕